

親沢の「人形三番叟」

中藤保則 (信州短期大学)

“Ningyo Sanbasou” at Oyazawa in Koumimachi

Yasunori Nakafuji (Shinshu Junior College)

Abstract: At Oyazawa area (Koumimachi) there remains very valuable traditional performing art “Ningyo Sanbasou”. And they say it continues for more than 200 years. It is really interesting that this Sanbasou is played by deku (ningyo) and it has a peculiar system of descend. Even now we can appreciate this Sanbasou in every April. But the descend stands on the edge of a precipice, for the population of young men is decreasing. The purpose of this paper is to present this valuable and rare performing art.

Keywords: Oyazawa, Koumimachi, NingyoSanbasou, Traditional performing art

1. はじめに

南佐久郡小海町の親沢地区に、200年以上も続いているといわれる伝統芸能「人形三番叟」がある。これまで、天災や戦乱、そして第二次世界大戦の最中でも毎年欠かすことなく続けられてきており、戦時中でも「今年は見合わせようか」という議論が起こったことさえないという。

そして、三番叟を木偶（人形）で舞うという珍しい芸能であると同時に、独特の厳格な伝承システムをもっており、その意味でも非常に興味深いものがある。

三番叟にかかわっている人は、「何か怖ろしい祭」と感想をもらす。あるいは「ヤクザの組織のように片足つつこんだら足を抜けない」ともいう。稽古の間、演じる役者は親方に、親方は「おじつつあ」に絶対に逆らえないからであるが、この独特の伝承システムが、継続の大きな力になってきたともいえる。

しかし、この伝承システムはすでに成立しなくなっている。理由はただひとつ、若者の数が減少し続けているからである。親沢地区は小海町でもひととき山深いところに位置しており、林業が主体の90戸程の集落であった。現在では農業が主であり、しかも兼業農家が多いが、交通アクセスの改善もあいまって若者が外へ働きに出るようになった。かつては外へ出て行った人も、三番叟には仕事を休んで帰ってきたというが、若者の数の減少は如何ともし難いのである。平成14年、7年ごとの引継

ぎの年、木偶4人、囃し方8人、合計12人の役者がついに揃わなくなった。

親沢の人形三番叟は、現在も毎年4月、親沢諏訪神社（大明神）で、春の祭典として開催されており、私たちもそれを観ることができる。だが、いつまで続けられるかは誰にもわからないのである。

この貴重な伝統芸能が、できる限り長く継続されていくことを願って、その概要を紹介する。

2. 式三番（しきさんば）と三番叟（さんばそう）

まず、三番叟とは何かを知る必要がある。歌舞伎通であるか、身近なところで三番叟や式三番の伝統芸能が継承されている場合を除けば、普段耳にすることもない名称であると思われるからだ。

平凡社『世界大百科事典』によると、三番叟とは「能楽《翁》（式三番）で、千歳の舞・翁の舞に続いて狂言方が担当する役とその舞事（まいごと）」とある。能楽の《翁》は翁、千歳（せんざい）、三番叟の三役による祭儀的な歌舞で構成され、天下泰平、国土安穩、五穀豊饒を寿ぐ。古来神聖な曲として他の曲と別種に扱われた。叟とは「翁、細長く痩せた老人、長老」を意味するから、三番叟とは三番目に舞う翁とその舞の意味である。

また、「翁は天下泰平を祝福するのに対し、三番叟は五穀豊穡を祈願するとされ、技法上、足拍子を多用するので、この舞を舞うことを〈踏む〉ともいう。そこに農耕儀礼にかかわる地固めの意図が介在している。三番叟

はまた日本各地の民俗芸能や人形芝居のなかにも、さまざまな形態で祝言の舞として残されている」

親沢の人形三番叟は、地元では「さんば」と呼び慣わされてきたし、翁、千代、丈、三体の舞が舞われるので、翁、千歳、三番叟の舞が繰り広げられる式三番と全体の内容は同様なものである。能楽では、三番叟を含めて「翁」、あるいは「式三番」と呼び、翁を含めた式三番を三番叟とはいわないという。全国的にみれば人形式三番はいくつか残されているので、このあたりに親沢の人形三番叟の歴史を示唆するものがありそうだと推測されている⁽¹⁾⁽²⁾。

3. 親沢の「人形三番叟」

(1) 厳格な独自の伝承形式

前述のように親沢の「人形三番叟」の伝承形式は、きわめて独特で、しかも徒弟制度といっても過言ではないほど厳格である。まず、人形（木偶）を扱って舞うのは役者と呼ばれる若者である。役者は同時に弟子とも呼ばれ、親方には絶対服従で一切逆らうことはできない。役者を7年務めると親方になり、次の役者を育てる役目を負うことになる。親方を7年務めると「おじつつあ」となり7年間、親方が役者に正しく指導しているか、伝承が崩れていないか見守り指導する役となる。つまり役者としてスタートすると合計21年間、人形三番叟にかかわることになるのだ。

「おじつつあ」役を終えた後でも三番叟から完全に離れられるわけではない。親方や役者は身内の不幸や出産などがあると役を演じられないしきりになっており、翁、千代、丈、囃し方、それぞれ直系の親方や役者が出役できなくなった時は、降格して役目を果たさなければならぬ。

この独特の継承方式が、これまで人形三番叟を継承させてきた最大の要因であろう。戦前までは数え年15才から40才までの有力な農家を継ぐ男子が世襲することになっていた。しかし、少子化、あるいは集落を離れる若者が多くなって、世襲制度は崩れ集落全体で支えることになり、そしてやがて役者を担う若者が揃わなくなったのである。

筆者がこの親沢の三番叟を知ったのはある会合で話を聞いて興味を抱いたからだだが、すぐに縁あって井出園達さんを紹介していただいた。井出さんは丈を継ぐ家系の長で、自身、三つの役を経験し、現在は人形三番叟の保存と研究・記録に熱意を注いでおられる方である。二人

の息子さんも丈を受け継いでいる。

予め“取材”のためにお宅に伺い、平成21年4月5日の三番叟当日も、再びお邪魔したのだが、両日共に豪快なまでにお酒を勧められ、酩酊したあげく、翌日かろうじて覚えていたのは井出さんの三番叟に寄せる情熱とお話の断片だけといった有様であった。

この稿はほとんどすべて、井出園達さんにいただいた資料、お貸しいただいた資料とお話に基づいたものである。紙面を借りて厚く御礼申しあげたい。

(2) 親沢の人形三番叟の起源

長い歴史を誇る親沢の人形三番叟であるが、その始まりは明確ではない。『小海町志』によると、親沢の人形三番叟は元禄時代（1688～1703）に始まったとあるが、しかし、『親沢の人形三番叟』⁽²⁾によると、その記録は発見できていないという。後述するが、この三番叟は隣接する川平地区の鹿舞（ししまい）と相前後して、対面する舞台で行われており、鹿舞には元禄5年という文字が残されているので、そこからの類推ではないかと見られている。

『三番叟と獅子舞の比較考察』⁽³⁾には、「起源は一般に天明3年（1783）と謂われているが、これは前記八男丸氏の謡本（後述）に記入の年代で、人形の衣類にある墨書等によりこれより古く、元禄時代より伝わりたる芸能と思われる」とある。

『南佐久郡誌』（民俗編）を見ると、親沢の人形三番叟の記述はあるが、その起源や歴史については触れられていない。また、慶応2年（1866）頃から休んだことがないという伝承もある。

いずれにして親沢の人形三番叟の始まりは、まだ明確には特定できていないようだ。

(3) 足袋が1度で擦り切れる稽古の日々

親沢の人形三番叟は、毎年4月3日に行われるのが通例であったが、今は4月最初の日曜日がその日に当てられているようだ。筆者は平成21年に初めて観ることができたが、前述のように4月5日の日曜日であった。また、明治時代初期までは旧暦の3月3日に舞ったという伝承もある。

祭までの10日間前後が稽古期間である。まず、4人の祭礼係が1年毎の持ち回りで決められる。祭礼係は準備から祭礼の終了まで、祭に関わるすべてを取り仕切るわけである。

3月23日に舞台開きが行われる。蔵にしまわれてい

た三番叟収納箱より取り出した練習用の木偶等を組み立てる。お神酒をいただきながら練習日程を決定する。稽古は3月25日から31日まで毎夜2回ずつ行われるが、役者は親方の家に「お願いにあがる」ことから始まる。親方は家に招き入れて酒肴でもてなす。酒肴を出すのは女性の役である。そして稽古場に到着すると、礼儀作法も厳しく、「お願いしやす」と挨拶し、「ありがとうございます」で終了するまで、弟子は師匠に絶対服従なのである。

稽古場には注連縄を張りめぐらすが、その瞬間から「注連」のうち、関係者以外は足を踏み入れてはならない神聖な空間になり、また女人禁制である。役者、親方が揃うと四隅に塩を撒き、木偶に供えられていたお神酒を左掌で受け一気に飲み干すと、稽古が開始される。この儀式は本番も同様である。

木偶は3体、「翁」は最も格式が高く、天下泰平を祈る神である。「千代」は神に仕える人間で、「翁」「丈」が途中でつける白色尉面、黒色尉面を納めた玉手箱を持ち、また「丈」が舞う最後の鈴の段で「丈」に鈴を渡す役でもある。「丈」も神であり五穀豊穡を祈るが、最も動きが激しく、前の2体の木偶は一人で扱うのに対して、体と足2人で担当する。「千代」は「千歳」から変化したもの、「丈」は「三番叟」の「黒色尉」からの変化とも考えられるという。

最も重いもので4キロあるという木偶を両腕で差し上げて舞うのであるから、相当な重労働である。たちまち汗が吹き出し、足袋は1日で擦り切れるという。その足袋もすべて自前で、夫人が毎日繕い、繕いきれなくなると新しいものに履き替えるのである。

囃し方は「大鼓（おおどう）」1人、「小鼓」4人、「笛」3人の8人であるが、役者同様それぞれに親方、「おじっつあ」がついて、前の親方から教わった通りに型を崩さないことが求められる。

3月30日前後に「検閲」が行われる。役者だけではなく親方も一番緊張する日である。「おじっつあ」が参加して芸能が正しく伝達されているかどうかを検閲するのである。たとえば役者が正しい動きをしていないと、「おじっつあ」はそれを指導している親方を呼んで注意を与え、役者を直接指導することはない。

4月2日、舞揃い（ぶっそろい）が行われる。精進潔斎して木偶人形などの装置を祭本番用に改め、諏訪大明神西の舞台で2幕舞う。1幕目は稽古であり親方の指導があるが、2幕目は親方といえども口出しはできなくなる。役者が神になるからである。ここで人間も神になる

のだ。

稽古場への差し入れも女性の役である。なかでも自家製の味噌と刻んだフキノトウ、ユズなどを入れたミソ饅頭が定番になっているという。検閲の日は12人の「おじっつあ」も加わるので差し入れもさらに大量になる。

(4) 「かしら」と『三番叟御手本』

親沢の三番叟は「川平の獅子舞とは関係が深く、古老の語るところによれば田楽能の流れをくむものなり」という⁽³⁾。現在の能楽は南北朝・室町時代に、観阿弥・世阿弥父子が猿楽能に物語り性を取り入れて大成したものである。猿楽はもともとシルクロードを伝わり、唐から奈良時代に日本に入ってきた散楽を母胎としている。したがって、親沢の人形三番叟は、完成された能楽よりも、古式能、猿楽の香を漂わせているのであろう。

親沢には現在4組の式三番の「かしら」があるという。1組は元来親沢に伝わっていたもの、2組目はその劣化が激しいため、昭和30年に大阪文楽の人形細工師であった大江巳之助氏（徳島市）に依頼し模刻されたもの、そして平成15年には（財）東日本鉄道文化財団の助成をうけて新調されたものが2組である。

これら「かしら」の最大の特徴は、そのうなずき形式にあるという。また親沢には、人形三番叟の「かしら」人形芝居につかわれたと思われる「かしら」が33点保存されている⁽²⁾。

また、親沢の人形三番叟には何冊かの『三番叟御手本』が残されている。継承者が7年目に代わるごとに以前からの『三番叟御手本』を写してきたからのようである。代替わりごとに必ず実施していたかどうかは不明とされている⁽²⁾。

前述の八男丸の謡本とは、「大正六年四月四日 引渡す 丈師 井出八男丸 記ス」と奥書がある『三番叟御手本』のことである。また、井出園達さんも「昭和四拾貳年引受 昭和四拾九年四月四日 引渡す 丈師 井出園達記す」という奥書のある『三番叟御手本』を保存しておられる。

(5) 祭礼当日

親沢の人形三番叟と川平の鹿舞が演じられる舞台は、これも他に例を見ないものである。親沢諏訪神社の本殿と神門の間の平地に約20メートル離れて2つの舞台が東西に向かい合っている。西部隊が親沢舞台と呼ばれ、東舞台を川平舞台と呼ぶ。

観客は東舞台で演じられる川平の鹿舞を見物し、それ



開演前の神事



人形三番叟

が終わるとくると向きを変えて、西舞台の親沢の人形三番叟を観ることになる。

特にその趣向を凝らすために造られたのではなく、諏訪神社が親沢集落とその東隣の川平集落、双方の鎮守であり、それぞれが奉納舞台として造られたからと考えられている⁽³⁾。

祭礼当日は、笛の音も賑やかに行列をつくって進んできた川平の鹿舞の一行が登ってから、役者は神社の石段を登り、神門をくぐって本殿に至り、神官に「ご祭礼でやす」と挨拶してお神酒をいただく。お神酒を飲んだ瞬間から「神とみなされる」という。そして、西の舞台に待機する。若者頭は東の舞台に待機している川平の鹿舞のところへ挨拶に行き、お神酒をいただいて「さあ、始めとごんなんし」と口上を述べる。

午後1時頃から約90分の川平の鹿舞が終了するとすぐに親沢の人形三番叟が開始される。川平の鹿舞もきわめて古い歴史をもち、興味が尽きないが、それは次の機会に譲ることにしたい。

親沢の人形三番叟の演目は、以下のようになっている⁽³⁾。

開幕 諸役登場

1. 序 翁様口上
 2. 露払い 千代様の舞
 3. 翁の舞 ①対面 ②ワカ ③翁舞 ④万歳楽
⑤翁帰り
 4. 三番叟 ①揉みの段 ②狂言問答 ③鈴の段
- 閉幕 三番叟面返り

内容まで紹介する能力も紙面もないが、約90分の舞のうち、丈の最後の鈴の段は約30分と一番長く、種を蒔くしぐさであるという。五穀豊穡を祈る舞である。

4. おわりに

出演者は「やっている時は、これほど辛いものはない」という。だが、毎年、舞い続けてきたのである。

「これに耐えられると、何事にも耐えられる」ともいう。「さんば」は村の人々に脈々と受け継がれてきた山の民の伝承である。かかわっている人たちは、時には遙か遠い祖先のことを想うこともあるのかもしれない。

ある関係者は「受け継いできたものは舞や囃子だけではない。大きな目に見えない愛のようなものだ」と語る。また、地域に家があるごとく、「さんば」があるともいう。そして、「引き継ぎたいのは芸だけではない」とも。

山に生き、神に祈った山の民の芸能が200年以上の時空を超えて今に続いているのだ。

筆者などはほんの少し垣間見ただけにすぎないが、親沢地区の人たちの人形三番叟にかける想い、そして、いかに大切に継承されてきたかを感じることができた。

この貴重な伝統芸能が、できる限り長く続けられていくことを願わずにはいられない。

親沢の人形三番叟は、長野県無形文化財に指定されている。

[投稿2009年11月2日、受理2009年12月25日]

[注]

- (1) 編集・井出園達、監修・後藤淑、大谷津早苗『親沢の人形三番叟の考察』2001
- (2) 後藤淑・大谷津早苗『親沢の人形三番叟』親沢人形三番叟保存会、2005
- (3) 編集・井出園達（平成13年祭典係）、井出三彦（同）、監修・後藤淑、大谷津早苗『三番叟と獅子舞の比較考察』小海町教育委員会・小海町文化財調査委員会
- (4) 井出園達さんにVTRを見せていただいた下記のTV番組も参考にした。

ふるさとの伝承「春に舞う木偶」NHK、1997年5月18日放送

SBCスペシャル「神となった山の民」SBC、1999年4月22日放送